

## 人間らしさの生態的基礎

### —自己家畜化論の再検討のために—

#### Ecological Basis of Human Cultural Life

木村 光伸

KIMURA, Koshin

#### はじめに

時として、あるいは性懲りもなく人間は自分たちの置かれた位置を見失うものである。東日本大震災は「私たちが忘れてきた自然の歴史」と「経験知としての未曾有の大災害」との関係を端無くも暴きだし、文明の脆弱さを顕わにした。いわゆる 3.11 の悲劇についてはすでに多くの識者による見解が氾濫している。それらの中で共通していることは「自然災害と人災（すなわち文明が作り出した巨事故の構図）を峻別すべきである」ということだろう。同時に識者たちはこれを機に「真に循環的な社会システムを構築すべきである」という。それらの意見を見聞きするにつけ、「その通りだよなあ」と思う私自身とともに「自然と人間の関係はそんなに簡単に切り分けられるものではないだろう」と自問自答する私がいることに気づかされる。さらに「循環型の自然が必ずしも人にやさしいというわけではない」とも。歴史を振り返れば、人間の手になる技術革新が人間社会のあり方を規定してきたということを理解することはできる。しかし、そのような社会変動の仕組みが、われわれの自覚し得ないところでわれわれ自身の生活を操作しているという現実には認識できない。ならば 3.11 はわれわれに何を突きつけ、あるいは何を語りかけてきたのだろうか。

個人的な経験から稿を起こしたい。私は霊長類の

生態と彼らが生息する自然環境に関心を持って野外研究を続けてきた者であるが、長年にわたって主たる調査地としてきたコロンビア・アマゾンのマカレナ熱帯雨林の中では、しばしば巨大な樹木の終焉に出くわした。真夜中に大音響とともに崩れ落ちる巨木とそれに引きずられるように連動して倒壊する周辺の樹木群は、悠久の時間が流れる緑の絨毯に数十メートルにも及ぶ穴を穿ち、風景は激変する。それはサルたちが空中に展開する通り道を分断し、夜の鳥からねぐらを奪い、昼間の鳥たちに休息の場を失わせる。何百万頭もの昆虫たちが、その瞬間から生活の場を新たにするために動き出す。植物たちは光と空間の争奪戦を始め、瞬く間に緑によってその場は埋められていく。すべての生物が生きるための戦略の全面的な変更を迫られるのである。熱帯雨林に生きるものたちにとって、それはまさに宇宙の崩壊なのだ。そしてその崩壊はかれらの新しい生活の始まりでもあり、飛躍のチャンスそのものでもある。考えてみれば人間を取り巻く自然という存在は、そのようにカタストロフィックな変化の繰り返しによって持続している。人類進化の揺り籠とされる東アフリカの乾燥した自然を形成してきた元凶の大地溝帯はそのような変化を 500 万年以上にわたって維持し、いまでも毎年少しずつ裂け目を拡大しているという。ただし、そのような環境変化に対する適応などとい

う自覚をもって人類が進化を遂げた（環境を主体的にかぎ分けてきた）わけではないという意味において、人類は崩れ落ちた大木の周囲で右往左往するアリたちと同類なのである。また進化という長大な物語の中では「少しずつ」は「穏やかに」を含意しないということも肝に銘じておかねばなるまい。災害とはそのようにして生じる現象なのだ。

私は3.11を人間生活の愚かさの必然的な帰結などと言いたいわけではない。しかし、原子力発電所という夢の巨大装置が引き起こした結果に右往左往していながら、われわれの生活の根本的な見直し以前に自然エネルギーや代替エネルギーに飛びつく姿勢は、人間が自ら形成し発展させてきた「自らの養い方」（これを生活とか文化とか文明という言葉に置き換えても同様である）の根本精神に由来するのではないか。霊長類学者の伊澤絨生がよく言っているように「楽をして旨いものを食う」のが動物の本性であるとすれば、人間の生き方の現状はその基本線を一步も超えるものではなく、しかも自らの生活基盤を掘り崩すという点では動物以下であって、そのような「文化」を持つ、あるいはそのような「文化」しか持たない存在としてのわれわれ自身を振り返ってみれば、いったいどのように人間は自己をコントロールしてきたといえるのだろうか。未曾有の大災害に遭遇して、いまや私たちは過去の文明を自らの生活のラディカルな意味における自己否定とともに乗り越えなければならないのである。

### 人類史の中で

初めに断わっておかねばならないことがある。それはこの稿が「人類再生の道しるべ」となるものではないということである。3.11以降、昨今の巷間の識者の発言を仄聞すると、われわれ現代人とりわ

け先進諸国の住人が、地球環境に暮らす生物の中で唯一の不遜で資源独占的行動に奔走する極悪非道な存在であるかに聞こえることが少なくない。しかし、われわれがそのような存在になるに至った経緯を考えるためには、ヒトが辿った生物としての「進化の道筋」と人間が歩みの中で育んできた生活技術や思考としての文化を蓄積させてきた「進歩の過程」の両面から、その結果としての人間存在を省みることが必要である。そのような考察を成就させるための手がかりとして、私は野生霊長類（とくにニホンザルと中南米に生息するオマキザルの仲間）の生態に関心を持ち、同時にいくつかの地で少数民族の暮らしを垣間見てきた。それがそのまま学問的に繋がるかどうかはいまだに判然とはしない。ただ、人間がいまもサルの類でありながら、サルとしての生態的地位を離れて唯一世界を独占する存在となっているという現実には、人間存在を再考する際に忘れてはならず、人類進化をひも解く方程式において重要で未解決な項なのである。最近ではチンパンジーの認知能力をひとつのモデルとして人間の持つ知性の問題に接近しようとする方法もある。京都大学のアイ・プロジェクトなどがそうだ（Matsuzawa et al. 2006 など）。

地上を二本足で歩くことから人類の生活は始まった。とはいっても二本足で歩いたからといって生活の質がそのことでただちに變化したわけではなく、その時点でわれわれの祖先は動物そのものであっただろう。ところが生物学的に見てみれば、二本足で歩くという行動様式はただちに身体全体に大きな變化を与え、同時に行動上の変容をもたらしたのだとも考えられる。そのような証拠が近年次々と発見されて人類史が大きく書き換えられつつあるが、そのひとつ、エチオピア・アファール地方の乾燥地帯は

人類誕生の歴史を伝える化石の宝庫だ。いまから440万年前のラミダス猿人はすでにチンパンジーからヒトの系統へ連なるものへと存在していたことを窺わせる (Science ed. 2009: 特集など)。300万年前のアファール猿人になるとはっきりとした直立二足歩行が認められるとともに直立性と生活様式の関連性が想定されるようになるようだ (Johanson et al. 1981 など)。自由な活動性を得た手 (前肢) はもはや移動器官としてではなく、生活を支える可動器官やマニピュレーションのための道具として日常生活や育児に存分に発揮されていたことだろう。さらに直立した生活は脳を大きくし (こんなに簡単に断定的に記述してよいのかどうか、私個人としては少し躊躇するところがあるのだけれど)、結果として知的な活動を増大させたと想定される。そういう意味において、ヒトがサル的な生活から脱却した要因として直立二足歩行が果たした役割は限りなく大きい。ただ、だからといってその時点でヒトがサル的な食物摂取のあり方を脱却して、初期的な採集狩猟経済いわゆる「手から口への経済」に移行したというわけではないだろう。なぜなら、そのためにはヒト間の相互的な社会関係の形成、たとえば食物の分配などの仕組みとコミュニケーションの手段が必要だったからである。

自然を利用し、自然の直接的な脅威を受け続ける存在、つまりは自然そのものとして生きるということは、従属栄養生物としての動物がもつ生活上の一般的な特徴に過ぎないのであるから、生物としてのヒトが人間になるためには自然と人間との間に対立的とまでは言わなくとも相互に向き合う行為が必要であったと言わざるを得ない。それが「自然の社会化」あるいはその結果としての「自然からの疎外」であった。それは人間の行為としては栽培植物や家

畜の生産・維持管理などということであり、いわば「意識的で主体的な生物的生産」の始まりなのである。この人間独自の営為は、人間の論理によって形成された二次的環境を生物圏の中に展開することでもあって、その最大の結果が人間活動の集積化・重層化そして都市の誕生というかたちで結実したのである。そのような歴史的過程はホモ・サピエンスの20万年の歴史に沿って緩やかに進行したのではあろうけれども、とりわけ農耕・牧畜の発生以降のおよそ1万年前を考えると、生物原則を離れた急激な変化となり、それは必然的に生活に必要な資源・エネルギー需要の爆発的増大となって現出する。さらに産業革命以来の人間活動は、人間社会全体の共同意志 (あるいは幻想) として、あたかも自己の欲望の無限拡大こそが人間の究極的目的であるかの様相を呈して、われわれの現代社会に連なっているであろう。

このような生物学的な意味でのヒト化すなわち人類進化のプロセスと人間化過程としての文化集積や社会的発展の問題を考察するにあたっては、霊長類各種の行動や生態の理解と人間行動の比較検討が必要である。とはいうものの比較という行為は相同現象の通時的な変化を捉えるという視点で展開されるにもかかわらず、ともすればその中に共時的な構造として現れてくる相似 (系統的背景をもたない類似性) を包含してしまう可能性をいつも孕んでいる。とりわけヒトを含む霊長類全体に関係するような行動の相同性を、どのようにすれば科学的に明示することができるのかという難問がそこには横たわっているのである。

日本の霊長類学は1950年代より社会構造論や文化進化論 (現生霊長類の各系統群に発現する萌芽的文化現象の発見) を基軸として展開されてきた。そ

の学史的流れを詳しく紹介する紙幅はないが、要約すれば、そこには人間文化の視点をサル社会に適用したところから始まる共感法という研究手法に起因する問題が常に付き纏っていた。

それでは、サルとヒトを比較することから始まる人類探求と、世界で人間の生活を通暁する調査を通して、私が得たことはいったい何だったのか。そこに私は無意識なる自己人為淘汰に支配された人間を発見するのである。

### 旅の果てに了解したこと

私の野外調査の大半は中南米熱帯雨林との関係で実施されてきたから、私のイメージする原自然は生物多様性に富んだ森林である。しかし生態学が教えるところによれば、森林と草原を比較してみても単年当たりの一次生産量にはそんなに違いがない。むしろ草地生態系の生産力の高さに驚かされるくらいである。もちろん現存量すなわち植物体としての蓄積からいえば、森林のほうが圧倒的に大きいのだが、それではわれわれ人間の生活と直接的に結びつく生態学的数値からいえば、純生産量か現存量か、どちらが重要視されるのかということを考えておく必要があるのではないか。そういう視点で私は熱帯森林調査と併行してアジアの草原地帯を歩き回ってきた。それは主に現在では中国に従属する地域なのであるが、具体的にはチベット自治区、新疆ウイグル自治区、内モンゴル自治区などであって、それぞれに文化的背景や宗教的背景、あるいは民族ごとの社会構造などを異にし、また歴史上の事実として互いに影響されてきたところでもある。森林と草原という生態学的に対比される世界において、そこに定住して生活を営んできた人々の「生活の質」の違いを考察することで、人間にとっての環境とは何かとい

うことを考えるヒントが得られるであろうというのが、このような場を選んで旅してきた私の目論見である。

最近の研究 (Mann 2005 など) は、アマゾン熱帯雨林地域がけっして人跡未到の地や世界最後の処女地などではなくて、長期間にわたって人間がその生活の痕跡を積み上げてきたところであるということ論証しつつある。そのような事実はわれわれが調査してきたコロンビア中部マカレナ地方の熱帯林でもよく知られている。マカレナ調査地は東アンデス山脈がアマゾンへ崩れ落ちた低地熱帯に位置しており、さらに東方の独立したテーブル・マウンテンであるマカレナ山塊との間に熱帯林の絨毯を形成している。熱帯林にはいくつかのパターンが存在するがマカレナは其中で熱帯季節林というカテゴリーに分類される。熱帯季節林には短期間ながらほとんど降雨のない時期があることで、植物の多様性に富み、その結果として昆虫などの種数も際立って多くなっているようだ。そして何よりもここで大切なことは、そのような多様な生物が織りなすネットワークをうまく利用することで地域に密着した人間の生活が展開されてきたということである。われわれはこの地で人間の利用が促進したと思われるいくつかの有用樹種の高密度分布を見出してきた。それは数種のヤシ類、野生のカカオ種などで、同地に長く生活場所を維持してきたと思われるインディヘナの一族 (ティニグア族) がその主人公であっただろうと推測されている。われわれが調査を開始した 1970 年代半ばにはその一族はすでに数人の生存が知られるだけであったが、かれらが残したと思われる河岸の岩に刻まれた動物画、人物画あるいはさまざまな文様が過去の生活を想像させる。また現地では、私はかれらが製作したと思われる石器類を発見しており、そ

ここでは石器類とともに大量の剥離屑が存在することから、その場所が石器の利用場所のみならず製作現場であり、あるいはコロンビア・アマゾンを覆い尽くす低地熱帯地域における石器流通の出発点のひとつであった可能性も示唆される。それがいったい何年位前のことなのかはよくわかっていないが、少なくともヨーロッパからの侵略者たちがその地へ到達した後も比較的近年までは、そのような石器を利用した生活が存在したことを窺わせるのである。そしてそのような文化的道具立てがあつてこそ、アマゾン地域における人間（ここでは先住民社会）の文化的営為が維持されてきたのであり、その生活が植物や動物の分布や生息密度にさえ少なからぬ影響を及ぼしていたことが窺えるのである。

さてこのような事例は何もマカレナに限ったことではなくてアマゾン、オリノコの二大河川の中上流部ではあたりまえの事態であったのだと思われる。マン（Mann 2005）はもっと極端にアマゾン川流域のおよそ半分は何らかの形で人間の痕跡をとどめており、その中にははっきりと灌漑や農地の造成が認められると述べている。

さてマカレナでは前述のような先住民の生活とは独立に征服者たちの末裔たる現在の住民たちによって形成された社会的な場とそこでのかれらの生活が展開されて現在に至った。先住民社会が長期にわたって蓄積してきた「自然との生き生きとした交流」の歴史やそこから生まれた自然物についての膨大な経験の蓄積あるいは知識といったものは、かれらの狩猟採集民としての生活に依拠して形成され、またそれを支えていたわけだが、それらの大半は現在の生活者にはほとんど継承されることなく消滅していった。散発的に生存している先住民の末裔たちがそのような生活技術の断片を現在の住民に伝えてはい

るが、したがって現在の住民たちでさえ私たちのように現代社会の最先端から飛び込んだ人間よりもはるかに多くの自然知識を所有していることは明らかではあるが、それを「自然との生き生きとした交流」の中から学び取った知恵の集積と呼ぶには、先住民に比しても、あまりにも後退したものなのであろう。ここで確認されることは、近代の人間がいかにも自然との暮らしを希求しようとも、現実に得られるのは自然との一体感などではなくて、あくまでも自然の利用者・破壊者としての暮らしやそのための知識に過ぎないということなのだ。

他方、アジアの草原地帯や高度地域に目を転じれば、そこには熱帯森林とはまったく趣を異にする生活を営んでいる人々の社会を見ることができるといえる。そのいくつかを管見しつつ、自然と人間の関係をもう一度考えてみることにしよう。

私が経験してきたそれらの地域に共通するのは、そこが中国支配下にある少数民族自治区であるということだ。それは民族固有の文化を抑圧された地であり、自己表現を制限された人々の住む大地でもある。そういった視点をまず持つことが調査にプラスなのかマイナスなのかという吟味をすることも、客観主義的な人類探求としては必要なことなのかもしれないと、私も思う。そう思うのだけれど、そういういわば現実社会が醸し出すイメージを先験的に取り込んだ心性で人々の暮らしを見つめるといっても、ある意味では霊長類研究における共感法にも似た接近態度ではないだろうかとも考えてしまう。結局はきわめて主観的な報告にならざるを得ないのだけれど、多様な人間の多岐にわたる社会のあり方を考察するうえでは、それも大切な視点なのだろうというのが、私なりの方法論にはあるのだ。

さて、そのような視点から対象地域を眺めてみる

と一つの共通項に気づく。それはチベット人であれ、新疆ウイグル自治区の諸集団であれ、内モンゴルに閉じ込められたモンゴル人であれ、自分たちの生活様式を「最上のもの」として自覚しているということである。「なんだ、あたりまえじゃないか」と思う人は一度、自分の生活についての自己意識を思い返してみればよい。あなたは現代社会の中で自己の位置と社会そのものとの間に存在する乖離感を持ってはいないだろうか。先進諸国住民としての満足感や優越感とともに、自然から遊離した世界で生活することから生じる自己への疎外感を持ちはしないか。そんなことは何も感じないという人は幸せであるが、その一点において、すでに文化的被抑圧者の敵である。自分たちの生活様式を最上のものと自覚する人々もまた、それゆえに他の民族にたいする嫌悪感を持つことが珍しくない。モンゴルの人たちは漢民族のような農耕生活を自分たちの暮らしと比べて一段低いもの、あるいは自分たちは手を染めないものと考えている。それでもツアンパ（麦こがしを水あるいはヤクのバターで練った主食）のためには麦を農耕民から購入する。歴史的に見れば本来が農奴的農耕民であったチベットの人々は自らが生産する裸麦、大麦、小麦などを使用して、同様のツアンパを作る。両者のツアンパには少々違いがないわけでもないが、同系統の文化様式を異なった生業形態を営む民族が共有していることも面白い。そこには国家としての現代中国におけるふたつの少数民族自治区間の比較などと言う視点からは読み取ることのできない何かが存在する。それこそが民族固有の生活実感なのであろう。「豊かさ」という概念が人間生活において必要であるとすれば、それは、このような生活実感を持って生きられるかどうかという点における評価指標としてなのではないだろうか。

上に述べた二つの地域はラマ教（チベット仏教）に支配される地域であるという共通項を持っている。それもまた両地域の歴史的交流あるいは支配関係の結果なのであるが、そういう意味でいうと、民族固有の文化とか地域独自の文化などという定義の仕方にも問題がありそうだとすることに気づかされる。私がそのことを強く感じたのは新疆ウイグル自治区のウルムチを訪ねた時のことであった。

新疆ウイグル自治区はウイグル族を中心としながらも多数の少数民族が共存する地域である。ここもまた漢民族の移住政策によって、主としてイスラム文化の抑制が強く求められてきた。しかしそのような背景に厳然と存在しているのは文化政策などではなく、中国の経済戦略そのものなのだとことを理解しなければならない。同地は地下資源の宝庫である。同時に風力発電の風車が見渡す限りに林立するようなエネルギー拠点でもある。そして沙漠の上を膨大な量のプラスチック廃棄物が舞っているような環境政策皆無の大量消費型ゴミ社会でもある。もともとウルムチの周辺は天山山脈などの万年雪から流下する水を活用した灌漑農業がおこなわれて、農作物や果実の一大生産地であった。今でも桃、葡萄などの産地として名高く、さらにはマーケットなどを覗くと、無限とも思われるほど多品種の南瓜などの野菜類が無選別のままで並べられている。農業生産という視点から見ればまことに面白い現象なのではあるが、それは当地に長く定住してきた人々が農業をそのように、つまり人間の手で支配しつくさないような大らかな手法で、展開してきた結果なのであろう。あとから入ってきた漢民族の人たちはあの広大な土地の中で、集約的な農業に専心した作物づくりをしているように見える。それは前者に比べれば生産効率のよい作業形態であろうし、商品作物と

して優れたものを供給しているのだろう。したがって、当然のようにウイグル人の農業は、収入という点でいえば、漢民族の人々のそれには遠く及ばないのである。そのような状況が経済格差を押し広げる要因であるが、ではウイグルの人々に近代的農業手法を教授することで何もかもが解決できるのだろうか。私はそうは思わない。そこにこそ、生業と文化、生活の総体が、歴史的な所産として抜きがたく合一している民族精神が存在するのであり、経済活動の安易な変革はそのような精神構造を根底から否定してしまうことになりかねないのである。近代化を押し進める国家の中にある少数民族の悲劇はそのように静かに、しかし深く進行しているといつてよいのだ。

もうひとつ事例を検討しておきたい。それはタイ北部の少数民族地域である。チェンマイの北西一帯からミャンマーにかけて多数の民族が集中的に生活しているが、それぞれの民族の人口規模は小さい。ここではモン族（メオ族などと呼称されることもある）の人々の小さな村を取り上げてみる。その村はチェンマイ市外からおよそ二時間のドライブで到達できる山岳地にある。いまでこそ二時間だが十数年前までは何度も車を乗り換えてその先は徒歩でしか行き着くことのできない辺鄙な場所であった。いや辺鄙という感想はそこを訪問する者の勝手な印象に過ぎないのであって、そこに住まう人にとってはどうでも良いことであつたに違いない。私は1995年と2006年の二度そこを訪れる機会を得たのだが、そのたった12年は、文化変容というか文化破壊というかはともかくとして、人々の暮らしを根底から変化させるに十分な時間だったのである。最初の訪問で、私は山中の急斜面に点々と竹づくりの家屋と小さな動物小屋が展望できる長閑な村に感動したこ

とを今も忘れることができない。村の空き地にはこれも小さな畑があり、時にはそこにケシの花が咲いていたりしたものだ。その後、アヘンの原料としてのケシ栽培は厳禁され、軍による徹底的な焼き払いなどもあって、そのような風景をいまは見るができない。しかし変貌はそれには止まらなかった。おそらく数少ない換金作物として栽培されてきたケシに代わる収入の道として、人々が考えたのか外部からのそそのかしがあつたのかは分からないけれど、住民が選んだのは観光で生きるという方法だった。たった十年ほどで道路は整備され、大型観光バスまでが村にやってくるようになった。村の坂道は土産物屋が並ぶ観光客用の商店街路となり、地元の民族工芸品、チベットやインドや何処のものかと言いたくなるような民芸品？の山に埋もれて片言の英語や日本語や中国語が飛び交い、商品が売れ、喫茶店舗の賑わう光景が日常茶飯事となっている。この変貌ぶりはいったい何を象徴しているのだろう。しかし12年ぶりに同地を訪れた私を驚愕させたのは、そのような風景だけではない。たしかに竹づくりの家屋などが消滅し、トタン屋根の密集街と化した村の変貌には落胆したが、それでもいまの世の中は金次第という側面を否定できないから、それはそれで人々の選択なのだ。ただひとつ許せなかつたのは自然の音まで壊したことであつた。竹の家屋に降る雨は自然の恵みや脅威を感じさせてくれた。しかしトタン板をたたく雨の音はただただ喧しいだけの暴力だ。そのような移り変わりの中で、人々は民族の素朴な音色を忘れ、タイの山中にロックの電子音を響かせることで国際的な生活文化に染まっていくのだろう。それを豊かさの証しなどと、私は呼ばせることができない。

現在世界中に分布している人間諸集団のそれぞれ

固有の文化から、人間がどのように文化的であろうとしたのかということとともに、文明化の過程で何を捨ててきたのかということが明らかとなる。生み出したのは欲望、失ったのは自然との同調性なのだとは私は考えている。

### 自己家畜化と自己人為淘汰

前節で私が言いたかったのは、人間の「文化なるもの」は地域の自然環境との間に交わされた相互交渉の集大成として存在しているということである。もちろんそこには他地域の人間との関係や歴史的なしがらみが大いに関係してくるだろうし、何よりも当事者自身がそのような関係を自覚しているわけではない。この自覚せざる環境との関係性こそが人間のたどった道における人間らしさの源泉となっている。それを自己家畜化という言葉で表現するのであろう。自己家畜化などという言葉を知ると、何やら人間が自らを意図的に「飼いならし」てきた歴史を指すような錯覚に陥る。しかしわれわれは自らを「飼いならし」たのではない。あたかも自然の存在としての生物種がその生活の場との関係で結果として選択圧を受容してきたのと同様に、人間は自然環境との交わりの中で「飼いならされ」てきたのであり、その後は「飼いならされ」続けることによって生じる次なる環境（それは徐々に人間臭い二次的環境と化す）による「飼いならされ」の過程が進行してきたのだといえる。そういう視点で見ると、自己家畜化とは人工環境への人類の適応の結果であり、その過程で働くのが自己人為淘汰の法則なのである。

自己人為淘汰という耳慣れない述語はいくつかの前提を包含している。ひとつは人為淘汰であるにもかかわらず、そこに自己の意図が存在しないということであろう。意図なき自己選択にはたしかに意志

は存在しない。しかしそのような誘導が生じる動因はある。それが欲望という心的過程なのである。動物はあらゆる意味において欲求を持つ存在だ。人間もその分に漏れない。しかし根本的に違うのは欲求が充足をもって終わる過程であるのにたいして、欲望は終わらない。そういう意味で欲求は動物行動一般が持つある種の鍵刺激と行動そして終息という一連の生物的過程に過ぎないが、欲望は次なる欲望を生み出す前提となる人間に特有な社会的連鎖過程なのであろう。

自己人為淘汰のもうひとつの前提は本稿の前半で述べた「社会化された自然」とその象徴たる「食料などの自己生産システム」として理解されている。それらは人間の従属栄養生物としての生存と人口拡大による生物圏制覇戦略のための装置となったが、その方向性を定めることはなかった。すなわち自己人為淘汰には「実目的」も「進むべき方向性」も存在しない。そこにあるのは欲望の限りなき連鎖だけである。それにもかかわらず、人間がいま見るようにある種の繁栄を遂げてきたのは、まさに畢竟の妙だと思わねばなるまい。

われわれの繁栄にもふたつの側面がある。人間としての歴史の前半の時代をわれわれは自然にたいする身体的な克服の時代として経験してきた。そこでも二次的環境への適応にはあったのだが、それは相対的にはきわめて小さく、欲望もまた自己完結できるくらいに卑小なものであっただろう。過酷な環境で生き延び、生活域を拡大させることが自己人為淘汰を推し進めたのだ。しかしそれは徐々にそして加速度的に消費生活を膨張させる方向へ変化した。そこからわれわれは生物としてのコントロールを失った自己人為淘汰による欲望の連鎖へと突き進んでしまったのだ。かつてゴーギャンは「われわれ

はどこから来たのか、われわれはなにものなのか、われわれはどこへ行くのか」というタイトルの大作を発表した。光り輝くタヒチにあつてなお、求めるものの尽きないような人間生活。それはわれわれの文明が行きつく先を暗示しているかのようである。

3.11 の悲惨な結末は、人間が文明化というスローガンのもとで何を掴んできたのかということに顕わにした。動物からの解放としての自己人為淘汰が人間にもたらした欲望の連鎖。人間は生物圏で人間が生き延びるためには何をしてよいという自由を獲得した。にもかかわらず、本当に生き延びることができるのかどうかは誰にも分からない。それでも、いや、だからこそなのか、3.11 の被災地では「再建」を求めて「絆」を模索する日々が続いているのである。人間が本当に自己の存在責任を自覚する日はまだまだ遠いようだ。

木村 光伸 (名古屋学院大学／霊長類学)

## 文献

- Johanson, D. C. and M. A. Edey, 1981, Lucy, the Beginnings of Humankind, St Albans: Granada. (『ルーシー—謎の女性と人類の進化』渡辺毅訳, どうぶつ社, 1986.)
- Mann, C. C., 2005, New Revolutions of the Americas before Columbus. (布施由紀子訳『1491—先コロンビア期アメリカ大陸をめぐる新発見』日本放送出版協会, 2007.)
- Matsuzawa, T., Tomonaga, M., & Tanaka, M. (Eds.), 2006, Cognitive development in chimpanzees, Springer.
- Science (ed.), 2009, Special edition: Ardipithecus. Science, 326 (5949), 2 October 2009.